

1950年代埼玉県における地域教育研究サークルの生成と展開 (2)

-埼玉教育研究サークル連絡協議会を中心に-

山田恵吾 埼玉大学教育学部教育学講座

キーワード: 1950年代、埼玉教育研究サークル連絡協議会、川口教師の会、斎藤晴雄

はじめに

本稿は、1950年代の地域教育研究サークルの活動とその意義を明らかにするものである。具体的には、埼玉教育研究サークル連絡協議会（1955年発足）の活動の展開過程を、教員社会の自律性の観点から検討する。

1950年代の教師の教育研究は、これまで民間教育団体の動きと日教組の教研集会に焦点が当てられ、「逆コース」「教育反動化」と呼ばれる政府の圧力に対峙する「官と民」の対立構図を前提に捉えられてきた。地域の教育研究サークルについては、史料的制約からその実態が明らかにされてこなかったこともあるが、総じてこの対立構図の中に解消される傾向にあったといえる。

しかしながら、はたして地域教育研究サークルを民間教育運動の一環として単純に捉えてよいものだろうか。本研究はこうした研究状況に対して課題意識を持つものである。筆者はすでに「1950年代埼玉県における地域教育研究サークルの生成と展開 (1) -川口教師の会を中心に-」において、川口教師の会を事例として検討した。そこでは、地域教育研究サークルが、官製的・半官製的な教育研究体制や中央の民間教育団体の「下請け」「教科セクト主義」を排し、教師の身近な実践上、職務上の問題を仲間とのやりとりの中で乗り越え、地域に還元しようとするものであり、「孤立感」を持つ若い教師の拠り所となるものであったことを明らかにした。つまり、地域教育研究サークルは、民間教育運動の中に埋没されない独自の教育研究活動を展開し、またそれを促す人的な関係基盤を形成するものであったのである。

本稿はその続編である。前編同様に教員の自律性の観点から、1955年に結成された埼玉教育研究サークル連絡協議会に焦点を当てる。教育研究サークルの研究の意義や分析視角に関しては、すでに前編で述べたのでここでは繰り返さない。鶴見俊輔によって先鞭が付けられたサークル研究は、近年も新たな研究が蓄積されつつあるが、そのほとんどが政治運動、文化運動からの関心によるものであり、教育研究サークルへの関心は高いとはいえない¹。「サークルの時代」と呼ばれる1950年代の集団のあり方が、教育研究に与えた意義について踏み込んでいきたい。

本稿では、埼玉教育研究サークル連絡協議会の発足の経緯、活動内容とともに、民間教育団体や日教組との関わりについて検討し、その特徴を明らかにすることを課題とする。埼玉教育研究サークル連絡協議会の活動を支えた一人である斎藤晴雄氏（1931-2012年）への聞き取り内容や埼玉教育研究サークル連絡協議会の機関紙に基づき検討する。なお、教育研究団体の呼称について、①中央組織もしくは全国的に組織的な拡がりを持つものを「民間教育（研究）団体」、②地域の教員が自発的に仲間を募ったものを「地域教育研究サークル」とする。

1. 埼玉教育研究サークル連絡協議会の結成

1955年、川口教師の会の新井忠雄と斎藤晴雄は、教育研究に関心を持つ教員同士のつながりを求め、埼玉県内で活動するサークルや教員のグループと連絡を取り始めた。新井は、「全国的な集會が大変な刺戟になることは事実です。しかしサークルの一部の教師があちこち参加できることより、サークルの外にいる沢山の仲間が、どれだけ多く参加できるかということが問題なのです。気軽にさそえ、出かけられる感激的な集會がもたれることが多くの教師のために大切なのです。そして各地域の教育を下から支えていくことのために、民間教育団体（地域の教育サークル）は横に広がることの契機をもっと大切にしなければならないのです。こんな気持からも、各民間教育団体が各自の特性を生かした関東地区の『お祭り』を強く要望いたします。²⁾」として、県下各地のサークルやグループに「連絡協議会の結成を呼びかけ」た。斎藤は、その「呼びかけ」の実態について、後年、次のように述べている³⁾。

考えてみると、おこがましい。20歳そこそこの若いのが、全県の各地のサークルを今こそサークルを作ろう、と呼びかけて、当時日曜ごとにリュックを背負って、埼玉県内を歩きまわりました。それはちょっとしたニュース。埼玉県の比企地方で郷土の歴史を研究しているグループがあるらしいと。「いたび」というのがたくさん残っていて、それをつなぎ合わせて中世の歴史を研究している連中がいるらしい。じゃあ行ってみよう。わずかな手がかり、当時、電話は家庭にはなかった。電話を個人で持っている人はほとんどいなかった。ですから、住所や県の職員の名簿にも個人の電話番号の欄そのものがなかった。住所の番地しかわからない。それでいきなり訪ねて行く。そうやって、そこと連絡がとれて、「歴史教育のサークルをただ古いものを掘り起こすためではなくて、それを今の歴史教育とどう結びつけるのか、地域に根ざした歴史教育の創造を」なんて。

遠隔地との連絡が容易でない、限られた条件のもとで、各地のサークル、グループに直接「呼びかけ」て、またそれに応じて発足したのが、埼玉教育研究サークル連絡協議会（以下、「埼玉サークル連協」と略す。）であった。1960年時点での参加サークルは、表1のとおりである。発足年が判明しているサークルで、1955年の埼玉サークル連協発足時にすでに発足していたものに、秩父索道の会（秩父、1952年）、のびろ会（浦和、1954年）、川口教師の会（川口、1954年）、いもづるの会（川口、1955年）、古河教師の会（茨城・古河、1954年）、比企教師の会（比企、1954年。上記の証言中の比企地方のグループ）がある（この他に、あぜみちの会（詳細不明、1955年））。これら発足間もない、地域に点在していたサークルの、お互いの手を取り合う様子がうかがえる。その後、正式参加の不明瞭なものも含めて、発足から5年後には約30のサークルによる団体となっている（表1の埼玉大学教育科学研究会は学生サークルである）。

表1 埼玉県における教育研究サークル一覧

	サークル名	会員数	事務局代表者（勤務校）	発足年、活動内容等（典拠）
1	本庄市社会科同好会	約40	卜部義典（本庄西小）	「テキスト研究、郷土研究」（第10号、1960.4）
2	本庄教師の会	14	金井茂樹（本庄藤田小）	「生まれたばかり」「五〇名位の会員で小中合同」「月一

				回「東大の五十嵐氏が毎回参加」(第10号、1960.4)
3	いるまの教師の会		長谷川稔(川越芳野小)	1958年4月発足。「会員制度をとっていない。」「生活指導の研究」「三か月に二回位。十五名位は必ずあつまる。会誌も八号出した。埼大の川合氏が参加」(第10号、1960.4)
4	雁が音教師の会		小鹿野芳寿(川越第一中)	「川越を中心」「主として生活指導の研究」(第10号、1960.4)
5	狭山教師の会	12	塩原勇(狭山入間川中)	「歴史は浅い」「生活指導中心」(第10号、1960.4)
6	秩父索道の会		加藤次郎(秩父久那小)	1952年発足(第3号、1956.7)
7	浦和教育を語る会	30	佐々木公彦(浦和木崎中)	「市内サークルの連合体的な存在になった」(第10号、1960.4)
8	浦和教育こんわ会		大谷三郎(浦和本太中)	「岸中の大谷さんが事ム局で月一回。生活指導、道徳教育の研究」(第10号、1960.4)
9	浦和理科教育研究会	10	持田一巳・駒井豊(南浦和中)	「土合中学校の駒井豊先生外七名の理科教師によって」(第2号、1956.3)。「第二第四木曜日に研究会」(第10号、1960.4)
10	浦和数学サークル		奥山(浦和本太中)	
11	浦和青麦会			「社会科サークル」「歴史の古いサークル」「月一回、平均一五名位」(第10号、1960.4)
12	浦和体育グループ	60	逸見時雄(浦和仲町小)	1956年発足。「月に三回位」「いつも十五、六名から二十名位」「小中合同」(第10号、1960.4)
13	浦和算数教育サークル			
14	浦和理科同好会		(丸山(浦和仲町小))	「教育課程協議会参加者のなかから、引きつづき研究していこうということで、会がつくられた。仲町小丸山さんが中心」(第10号、1960.4)
15	浦和国語サークル		(佐々木(浦和木崎中))	「木崎中佐々木さんが中心になり、月一回」「機関紙も四号まで出している」(第10号、1960.4)
16	浦和家庭科グループ			「主任会から生まれたサークル」(第10号、1960.4)
17	のびろ会		本庄満(浦和土合中)	1954年「土合教師の会」として発足(第3号、1956.7)。太田堯。 「ルソー研究、授業分析など」「東大の太田氏宅でよくやる」(第10号、1960.4)
18	大宮水曜会	8	吉田武(大宮片柳小)	「第一第三水曜日」「小学校の人中心」(第10号、1960.4)
19	川口教師の会	20	上村公美(川口仲町小)	1954年発足(第3号、1956.7)
20	川口算数教育研究会	20	飯塚昭雄(川口飯仲小)	1959年発足。「会員二〇名。いつも集まるのは、八名位。月二回」(第10号、1960.4)
21	川口国語教師の会	20	飯高登志夫(川口青木小)	
22	川口作文サークル	10	山村玲子(川口飯仲小)	「オギャと生まれたばかり、飯仲小の山村さんが中心」(第10号、1960.4)
23	いもづるの会	100	中村和江(川口仲町小)	「大宮いもづるの会」(第1号、1955.12)

		以上		「県下全体の作文サークル」「例会、機関紙、誌なども数多く重ねてきた」(第10号、1960.4)
24	埼玉大学教育科学研究会	40	芹沢和(埼玉大教育学部)	「学生サークル」(第10号、1960.4)
25	古河教師の会	12	戸井たみ子(古河市第二小)	1954年4月「ぼんくら教師の会」として発足、1956「古河教師の会」に改称(第3号、1956.7) 「県外より参加」(第10号、1960.4)
26	与野教師の会		平沢尙(与野市東中)	
27	比企教師の会		田口弘(東松山市松山中)	1954年1月発足、「会員約四十名」(第3号、1956.7)
28	(あぜみちの会)			(第1号、1955.12) 「熊谷?」(第2号、1956.3)
29	(北葛)		(岩松正英)	「北葛からのたより(岩松正英)」「六名」(第2号、1956.3)
30	(浦和)			「小学校の国語サークル、生活指導のサークルも生まれようとしている」(第10号、1960.4)

【備考】

埼玉教育研究サークル機関紙第1～5、7、10号(1955年12月～1960年4月。第1、2号の機関紙の紙名は『サークル通信(仮称)』、第3号からは『あしなみ』に改称された)より作成した。「1」から「27」の「サークル名」は1960年4月時点での名称(「県内教育研究サークル名簿(Ⅰ)」(第10号))。「25 古河教師の会」は、埼玉県に隣接する茨城県古河の教育研究サークルである。

埼玉サークル連協の事務局は、川口市立飯仲小学校の新井忠雄である。新井と同じ職場で事務局を支えることになった斎藤は、埼玉サークル連協の発足について次のように述べている⁴。

当時、歴教協なんてものはなかったですから。こういう仕事をやっていた時代にはまだ、全国的な民間教育団体はない。[全国的な民間教育団体が川口教師の会や埼玉サークル連協に対して]中央からも支部を作りましょう、サークルを作りましょうという働きかけがあったりとかそういうことはない。日本の民間教育運動の民間教育団体が次々に生まれてきたのは、1958年の勤評闘争なんかをくぐってのことでしょう。そういうものの前ですから、この仕事は、だから中央にある団体の下部組織を作ろうなんていう意識は全くないし、しかもそういうふうには、仮に中央にあったとしても、その下部組織だ、本部だ、支部だ、縦の系列で教育運動を捉えてはならない、そういうものが日本の教育をダメにしてきたという認識で、激しく教育における中央統制というのは必ずしも政策だけがやったものではない、という認識にわれわれも立ってましたからね。だからむしろ、中央で民間教育団体ができる足場のために、全国各地に支部を作る云々かんぬんという者に対しては、極めて警戒的で、サークルという以上は、地域に根ざさなければならない。地域の教育現実を無視してそこで何かを目指すような研究をして、そこで薦められてか、自薦か他薦かわかりませんが、ちょっとした実践記録なり、何か出版して、そうするとそれで有名になるという、それを目指すという流れは正直言って結構あったんです。戦後実践記録ブームみたいなことがあったり、今各地で著名な実践家が華々しく出てきたりしてした時代なんです。その人たちが、やっぱりそうやって自分の名を売っていくとか、そういうことが中止になってしまっていて、隣の教室の同僚、同じ学校の同僚、そういう人とどうやって一緒にやっていくかなんてことといえば、他と差別化されて、あの先生はすごい光ってるよねという、それを見せたいわけですから。我々は、光ることを求めないんです。光るなら一緒に光ろうというふうにして、「地域の高さこそ、わが高さ」ということを、その頃、スローガンのように言っていたんですが、そういう一種の運動論っていうか、そういう思

想を持っていましたから。

証言では、1958年勤評闘争以降に民間教育団体が「次々に生まれてき」とされているが、実際には、埼玉サークル連協が誕生した時点ですでに多くの民間教育団体が存在していた。斎藤が強調したかったのは、埼玉サークル連協が中央からの指示や圧力といった影響を受けて発足したものではない、「地域の高さこそ、わが高さ」の理念に共鳴した教員の自主的な集まりである、ということなのであろう。

実際にその「呼びかけ」に応じたのは、郷土研究、生活指導、理科・社会科、作文指導等、様々なテーマを持つサークルであった。ただし、すでに明らかにしたような、川口教師の会の問題意識⁵を共有していたところも多かったようである。たとえば、ある大宮のサークルの会員は、「当市では今まで、地道な実践や研究が正しく評価されない傾向があった。即ち、現場での仕事が各研究機関に報告されたり、教研活動に盛りあがるのが全くなかったのである。教研なども、校長会→主任会（県指導課）→教組ということで、一片の研究がなくとも、教育諸団体（官製半官製）で政治的に立ちまわるものが頭角をあらわすという古い伝統が一般の教師（新しく教師になった者も含めて）の実践意欲をそいできている。⁶」と述べている。教組の教研集会であっても、校長会と県当局の縦の指示系統によって制御され、それに順応する教員が、「地道な実践や研究」をしている教員よりも評価される状況を問題視している。当時の埼玉県当局主導の下で構築されつつあった教育研究体制や日教組の教研集会中心の教育研究では、地域の現実が突きつける問題を解決するような「地道な実践や研究」に取り組むことができない。それを可能とする教員の集まりを、埼玉サークル連協に期待していたことがわかる。

2. 埼玉教育研究サークル連絡協議会の活動内容

(1) 機関紙の発行

「埼玉教育研究サークル連絡協議会規約」（1955年7月31日から実施）には、同会の事業として、①各サークルの記録・研究の交換、②合宿研究集会の開催、③他県及び中央教育団体との連絡交流、④各種友誼サークルとの交流、⑤その他必要な事業、を行うことが定められている⁷。

その活動の核となるのが、機関紙の発行である。自ら鉄筆を持って機関紙の編集・発行を担当した斎藤晴雄は、「いま県下各地のサークルは目に見えない友情の糸でつながられています。“五円の握手”葉書ははげましといたわりをのせて飛び交い、私たちの実践を孤立から救ってくれています。でもこのきづなはまだまだかぼそく、と絶え勝ちです。私たちぼんくら教師にはもっともっと強い血の温かさの通うようなきづなが必要なのです。こんなきづなは、いま取交わされているかぼそい（でも強じんな）糸をみんなでより合わせることによってのみ作られていくでしょう。さあ根気よく糸をよりましょう。」と、創刊号の巻頭で呼びかけている⁸。「きづな」が強調されているように、直接顔を合わせるか葉書でのやりとりでしか交流ができなかった中で、機関紙の存在には単に情報交換の媒体にとどまらない重要な位置を占めていたことがわかる。

紙名は『あしなみ』（第1、2号の紙名は『サークル通信（仮名）』）で、第1～5号、7号、10号の存在が確認できる。B5判の謄写版（ガリ版）で各号4ページまたは8ページの構成となっている。1955年12月の第1号の発行から1年間に第5号までが発行され、その後は3年半の間に第6～10号が発行されている。最初の1年間で比較的頻繁に発行されているが、その事情は不明である。

表2 埼玉教育研究サークル連絡協議会『あしなみ (サークル通信)』掲載記事一覧

号	発行年月日	掲載記事	備考
第1号	1955.12	「発行にあたって」(S)、「[古河ぼんくら教師の会の活動報告]」(奈良達雄)、「サークル連協『冬の集会』」、「輝く若芽を」(西尾幸子・県教育研究所)、「[忍部十一校の第一回集会の報告]」(中村為紀・北埼玉川里村)、「[大宮いもずるの会の活動報告]」(別府幸子)、「主張 みんなの集りに」(T・A)、「古郷のサークルの友へ」(かわいあきら・埼玉大助教授、埼玉大教科研)、「ぼくらの願い」(小林守男)、「[報告]」(武井健夫・南埼玉喜町)、「私の職場では」(A・M・比企教師の会)、「小さな提案」(さいとうはるお・川口教師の会)、「教研の出发点」(正木欽七・土合教師の会)、「[報告]」(永野当志子・あぜみち)、「生まれ出づる悩み-大宮教育サークルから-」、「私の近況」(内野富子・本庄東小)、「与野から」(与野の仲間 小山内、大崎、松本、小島、島田)、「編集後記」(新井忠雄・飯仲小)	
第2号	1956.3.29	「二人の仲間 県教組へ-熊本・高野の両君へ-」、「サークル連協『春の集会』-第三回協議会熊谷にて-」、「春の訪れとともに-秩父さくどうの会-」、「主張 子どもと教師の夢を!」、「いもづるの会例会のおしらせ」、「県内各地の教研は?-四国でのある夜の話し合い-」(記録 木戸悌二郎・浦和教育を語る会)、「第二回協議会報告-暮の三〇日・むさしの荘にてくその一-」、「『でんでんむし』で」(大武昭雄・浦和教育を語る会)、「浦和理科研究会生れる」、「北葛からのたより」(岩松正英)、「日だまりの子ども-ある日の鉛筆対談から-」(S・川口教師の会)、「編集後記」(A)	
第3号	1956.7.30	「準備は完了・大いに語ろう-埼玉教育研究サークル合宿研究会-」、「新たな前進のために-第七分科会に期待す-」(事務局)、「サークル紹介-サークルの歩みを語ろう-」(秩父索道のあゆみ(加藤次郎)、「川口教師の会のあゆみ」(斎藤)、「家のねこ [児童詩]」(手塚実・古河第三小四年)、「汽車 [児童詩]」(尾花シゲ子・古河第三小四年)、「いもづる」のつどい [おしらせ]、「新たな胎動-深谷地区からの便り-」(小久保隆福・藤沢中)、「サークルの歩み 比企教師の会」、「小川からの便り」(小川、馬場)、「浦和理科の物語」(三井・本中)、「ぼんくらを返上-古河教師の会と改名-」、「埼玉大教科研」(斎藤)、「[土合教師の会]のおいたち」、「植民地根性からの脱出を!!」(やまぐちとみぞう・岩槻市)、「進学ノイローゼ」、「どうちゃん [児童詩]」(佐藤正勝・川口飯仲小六年)、「[報告]」(コマイユタカ・土合中)、「[報告]」(人権侵害居士)、「編集後記」	
第4号	1956.10.6	「関東教育学会研究大会開かる-サークル協から正木氏代表に-」、「鉄の町大宮で握手を-第五回例会準備進む-」、「今から考えておきたいこと」(事務局 A)、「関東教育学会研究大会への提言(要旨)」、「現場の教育研究をどう進めるか(提案要旨)-埼玉教育研究サークル連絡協議会-」(文責 正木欽七)、「夏の合宿集會に参加して-感想箱より-」(「第二分科会(国語教育)について」(茂呂康三郎氏・川越)、「第四分科会(理科教育)について」(三井)、「第五分科会(進学就職問題)について」(大島仁太郎氏・県教育研究所) (原和一氏・県教組中執) (やまぐちとみぞう氏・東工大)、「第七分科会(サークル問題)について」(浅見なか子氏・埼玉大学生) (埼玉大学生))、「編集後記」	
第5号	1956.11.8	「教科研関東地区研究大会-われわれは大会に期待する-」(事務局)、「私は期待している」(湯田堯・東京教科研)、「サークル協第五回例会」、「斎藤広一先生-影森中学校長へ-」、「教育実践者の研究について」(大島仁太郎・埼玉県教育研究所員)、「私たちは悩んでいる-サークル(大宮)の問題点-」(別府幸子)、「わたくしたちはこう学んだ-国分一太郎氏「教師」(その仕事)をめぐって-」(川口教師の会)、「サークルの友へ」(出牛恒・埼玉教組教文部長)、「編集後記」	
第7号	1958.1.1	「武蔵野荘で語り合おう-新春第一回のつどい-」、「みのりある話し合いのために」[[生活綴方的教育方法の発	

		展』の要約を掲載]、「編集後記」(S)	
第10号	1960.4.20	「サークル代表者会議開かれるー第五回関東地区集会をめざしてー」、「各地に新しい動きーサークル近況報告からー」、「第五回関東地区教育科学研究集会を秩父で（「運営組織はこんなふう」、「会のなかみはこんなふうに）」、「サークルをつくりましょう 活動をさかんにしましょうー事務局でお手伝いしますー」、「県内教育研究サークル名簿（I）」	

【備考】

埼玉教育研究サークル機関紙第1～5、7、10号（1955年12月～1960年4月。第1、2号の機関紙のタイトルは『サークル通信（仮称）』、第3号からは『あしなみ』に改称された）より作成した。

規約に定められた事業の①各サークルの記録・研究の交換、④各種友誼サークルとの交流、を目的とする記事が多くを占めている。機関紙を通じて、各サークルの活動内容やその成果、課題を伝え合う様子がうかがえる。同じく事業の②合宿研究集会の開催、③他県及び中央教育団体との連絡交流、に関わって、開催する集会・研究会や、他の大規模な研究会や学会へ参加した際の関係記事も掲載されている。

(2) 会合・合宿の開催

会合・合宿の開催状況を示したのが、表3である。欠号の史料があるため、1957年と1959年の会合や合宿の状況が不明であるが、a. 毎年の夏の合宿研究会、b. 春と冬の集会、c. 例会・代表者会議、d. 学会・民間教育団体への参加や共催、に分けることができる。

第1回（1955年）の夏の合宿研究会への参加者は150名であった。合宿の様子について、斎藤が次のように述べている⁹。研究内容はともかく、仲間との出会いに高揚した印象を強く残している様子がうかがえる。

川口教師の会を作る、そこを足場にして、埼玉のあちこちにサークルを作ろうと。そのために出かけていって援助します。おせっかいな話だね。いくつかできたところで、じゃあ、年1回位は一泊で合宿研究会をやるというふうにして、当時は埼玉大学が非常に協力的でした。埼玉大学のもとの教育学部はね、今のさいたま市役所になってますけども、あそこを使って一泊二日で借り切って、分科会をやったり全体会をやったりして、すぐ近くに共済組合の宿泊所があったんですよ。武蔵野荘っていうのが。ここも非常に協力的でそのために一泊すると、全館を借り切って泊まることもできたし、一晩中寝もしないで、おしゃべりしたり、大きな声を出して歌ったり、近所から苦情が出たりしたこともある。そういうことが、があつと盛り上がっていたわけですよ。

表3 埼玉教育研究サークル連絡協議会が開催・参加した会合（1955～1960年）

開催年月日	会合名・場所・主催者・(典拠)	話し合いのテーマ・内容	備考
1955.6	県下のサークル代表者の最初の集会 (第3号)		
1955	合宿研究会の集い(第1回)。150名の 参加者。(第3号)		
1955.12.30	「冬の集会」 浦和 むさしの荘 準 備 川口教師の会(第1号)	第1分科会「職場、サークル、教研のことなど」(第2号)	

1956. 3. 30	「春の集会」熊谷 富士見中学校 準備 あげみちの会（熊谷）・教組青年部	第1分科会 職場を楽しくするには。第二分科会 どんな学級が望ましいか。「この外、「地域でのサークルのもち方」、「夏の合宿研究会の計画」など話し合うことになっています。」	
1956. 7. 30・31.	「埼玉教育研究サークル合宿研究会（第2回）」	1日目 午前 講演（国分一太郎氏）、昼食・レクリエーション、午後 分科会、懇談・レクリエーション 2日目 午前 分科会、午後全体会、代表者会議	
1956. 10. 6・7	関東教育学会研究大会（於：埼玉大学）への参加	1日目 午後の全体討議「現場の教育研究をどうすすめるか」に、サークル協の代表として正木欽七（土合教師の会）が提案することに。（第4号）	
1956. 12. 9	第5回例会（大宮）大宮小学校（第4号）	①民主的な人間形成のための生活指導、②職場の教育研究とサークル（各地の経験交流を含めて）、③その他、教科研関東地区大会のことなど。	
1956. 12. 27・28	教科研関東地区第1回研究大会（東京目黒・学習院大学）（第5号）		
1958. 1. 11・12	新春第1回のつどい 浦和市常盤町 武蔵野荘（第7号）	テーマ 教師の仕事と教師の学習-作文教育発展のために- 1日目 学級経営の問題などを話し合う。テキストを中心にした話し合い（学級経営など）。 2日目 テキストを中心にして分科研究（①国語、②社会科、③理科、④芸術・体育）テキストを中心にして“教師の学習と実践について”の話し合い。 講演（題未定。たぶん詩の話、テキストに関係のある話）講師 寒川道夫氏（日本作文の会中央委員）	
1960. 4. 4	サークル代表者会議 浦和 13人の出席（第10号）	第5回関東地区教育科学研究集会（1960. 4. 29・30、秩父市）に関して。サークル協第6回合宿研究会として参加する。	

【備考】

埼玉教育研究サークル機関紙第1～5、7、10号（1955年12月～1960年4月。第1、2号の機関紙のタイトルは『サークル通信（仮称）』、第3号からは『あしなみ』に改称された）より作成した。

1956年7月30・31日に行われた第2回の合宿研究会の概要は以下のとおりである。講演、懇談、レクリエーション、分科会、全体会、代表者会議、という内容・スケジュールとなっている。国分一太郎の講演については、同時期（6～8月）に川口教師の会の読書会で国分の著書『教師-その仕事-』が取り上げられたことと関係していると思われる¹⁰。7会場に分かれた分科会では、学級経営、各科の指導、進学・就職・保護者などが設定され、教師の日常の職務の問題をテーマに取り組む姿がうかがえる。また、第7分科会「サークルのあゆみを語ろう」は「サークルは何んのために必要かの基本問題」「“サークル協”の存在理由」を問うことの必要性を示すものであった¹¹。

- 1日目 午前 国分一太郎氏の講演、昼食-レクリエーション、
午後 分科会、懇談・レクリエーション
2日目 午前 分科会

第1分科会 教室の子供達とどうとりくむか、学級集団の指導

第2分科会 国語教育をどう進めるか

第3分科会 社会科の指導をどう進めるか

第4分科会 理科を教えやすくするために

第5分科会 進学就職の問題をどうしているか

第6分科会 父母の願いと学校

第7分科会 サークルのあゆみを語ろう

午後 全体会、代表者会議¹²

(3) 他団体との関係

次に、d. 学会・民間教育団体への参加や共催の状況を検討する。民間教育団体の運動や教組の教育研究体制の状況を、埼玉サークル連協がどう認識し、どういう姿勢で関わろうとしているか、また、教育現場の声を受け止めたり、地域の現実に対応しうる成果を示し得ているか、つまり如上のサークルの方針が如何に貫徹され、具体化しているかをみる判断材料となる。

① 関東教育学会研究大会への参加と「提案」

埼玉サークル連協は、1956年10月6・7日に埼玉大学にて行われる第4回関東教育学会研究大会へ、後援の形で参加を決める。加えて、6日午後の全体会議「現場の教育研究をどうすすめるのか」での提案を、大会実施委員会から「要望」された。埼玉サークル連協では、「提案要旨」を事務局会議で策定し、土合教師の会の正木欽七を代表者として提案することに決定した¹³。提案要旨は次のとおりである（文責は正木欽七）。

現場の教育研究をどう進めるか（提案要旨）

一、現場では教育研究をどう受けとめているか。

「教育の現場は雑用の多いところである。しかも、衛生環境調査などがあると、授業をつぶして掃除をやる。便所には急にま新しい下駄が一時間だけそろえられる。教師は追いまくられ、子供をどなりつける。[中略] こういうありさまのところへ、県指定の研究校とか、市町村教委の一校一研究、又は、教組の青年婦人部の研究などが上から流されてくる。[中略] 先ず、県の指定校など、校長さんが引受けてきて、研究する教師の知らぬまにきめられることがある。又、急に研究テーマを出せといわれて、思いつかぬままに校長さんが教科研究会の理事などをしていて、相談というよりは上からおろされるだけだ。教師自身も、研究として仕事に追いまくられている時はブツブツというが、テーマをきめる出発点ではおざなりになっている。だから、やはり上からくる教組の教研大会の問題でも、自分たちの組織の力での研究でありながら、受けとめ方には一つもかわりがない。」

二、どんな形で現場の教育研究は行われているか。

「研究テーマが教師自身の意欲と無関係なので、せっぱつまる迄仕事はなげ出されている。二年間の研究期間があると、一年間は何も手をつけない。それでなかったら二、三の者だけが勝手に視察などしてすごしてしまう。いよいよほおっておけない状態になって、研究にとりかかる。はじめは、きまりきったように実態調査がわけもなくやられる。だが、必要だからやるというならまだ話がわかるが、なかには研究物の形をつ

くろうために、やられる場合さえある。この外に見せるための研究物であるパンフレットには、近頃実践記録などがのっている場合がある。ところが、他校の研究物をみてあわてて教師に宿題を出した一夜づけのしろものなのだ。だから、実践記録さえ流行ぐらいにしか受け取らないという、うわすべりがたくさん見られる。しかも、発表という段取りになると、どうしたらつかれずにすむかと苦心する。だから、教研大会などの共同研究という美名のもとでさえ、しばられて自由な討議などできない。まして、肩書のついた人たちがありきたりのほめ言葉をいってくれるが、その場だけのものでしかない。[中略] こんな有様で研究会が終ったあとは、がっくりくたびれてしまう。残ったのは、すりへって感動のなくなった教師であり、追いまわされてロボットにされた子供たちである。これでは、次の年に同じテーマと取りくむ気力が全然湧かないのも無理がない。」

三、こういう条件のもとで、サークルはどうしてきたか。

「現場は学問研究の場などとは違って、自由な討論など生かされない環境である。職員室、研究会などでついしゃべった女教師が、「私、やっぱりいわない方がよかったわ。」という言葉がよくきかれるからである。だから教師同志が、ピラミッド形の組織の中で、共同意識をどう育てるかという問題がある。この研究の土台となる環境を作るために、サークルは「仲間づくり」の相言葉のもとに、同僚との身上相談や、校長さんの困った気持にも答える努力をしてきた。だがその上に、みんなの日常の問題をとらえて、問題解決や現場の研究に迄組織化していく努力にはかけていた。[中略] サークルはまだまだ職場自体の力になっていない。特に目立っていることは、最近ではいな教室での問題がサークルで話合われているが、最も共通の話題になるところの学年会には持込まれていない。サークル員にはすべてを解放しながら、学年会では自からしゃべる限界をきめてかかっている。ところが、現場において学年会という、小さな単位は、自由に話す雰囲気も、ボロをかくさずに研究しあう場所でもあるのだ。[中略] 一方、研究テーマをきめる時など、学校の行事そのものや、日常の仕事そのものを研究しようとしな。研究とは特別な学者のまねごとでなくては、駄目なような錯覚さえもっている。しかし、現場の研究は特別なことととりくむ以前に、日常的なみんながやらなくてはならぬ仕事に新しいメスを加え、より合理的ないいものにしていくという問題をめくわけにはいかない。そんなものは研究ではないと教育学者がいったとしても、まどわされる必要はないように考える。なぜなら、この問題にサークルがとりくまないと、教師の意欲につながった自主的な研究を組織することは出来ないのではないかと思われるからである。ふりかえって、もっと広い立場からみると、埼玉は教科研、日本作文の会、郷土教育とあらゆるサークルが一しょになって協議会をつくっている。その点、私たちは多くの仲間と共通の問題で話合う手がかりは持っている。だが、サークルを本当にのぼすための力にもなる、サークルと現場とのかみ合いについての、経験の交流がまだ不足していることを、はっきり確認しなくてはならない。¹⁴

「県指定の研究校」「市町村教委の各校一研究」「教組の青年婦人部の研究」「教組の教研大会」などは、いずれも「上から」「流されてくる」「下ろされる」ものであるとの認識が明確に示されている。サークルは、「日常的なみんながやらなくてはならぬ仕事に新しいメスを加え、より合理的ないいものにしていくという問題」を大切にしながら、「教師の意欲につながった自主的な研究を組織する」べきとの認識をあらためて確認することができる。

②教育科学研究会関東地区連絡協議会第1回研究大会の開催をめぐって

続いて1956年12月27・28日に教育科学研究会関東地区連絡協議会の第1回研究大会（於：学習院大学）が開催されることとなった。東京教科研から参加を呼びかけられた埼玉サークル連協

は、話し合いの結果、「全面的に支持し、参加して行くこと」になったとしている¹⁵。同時に、埼玉サークル連協は、参加のあり方について、東京教科研に対して次のような主旨の書簡を送ったことを、機関紙『あしなみ』で報じている¹⁶。

- ・“東京教科研”の努力で、関東地方の仲間が集まるようになったことは教育運動を前進させるために画期的な意義がある。しかし
- ・関東地区の各地域で種々の条件の中で、それぞれの「イキサツ」を経ながら活動しているサークルの人々が、対等の立場で、共通の方向を求めての経験交流、はげまし合いによって、中広い運動を進めて行くためには“教科研”という看板や「ワク」にとらわれずに“関東地区教育サークル研究大会”とでもいうような性格（名実共に）のものに発展させて行くべきである。
- ・中央の民間研究団体の一つである“教科研”（現状では）に所属するサークルというような縦の線で統一しようとする方向を克服し、地域を横に結ぶ下からのもり上りを大切にして関東地区の運動を統一し、更に発展させるための議会にして行くべきであろう。

これに対して東京教科研の湯田堯からは、「特定のサークルや会だけが集まるのではなく、広い範囲の人たちサークル等が、この機会に結びつき、新しい色々な形のサークルが発生していくことを望みます。それが無理のない形で、教科研に統一されるならば、それで良いし、又、教科研のワクをこえた何らかの形に、教育の良心が統一されていってもよいと思います」としながらも、「埼玉の考え方に賛成」との返事をしている¹⁷。

しかし、斎藤晴雄の証言では、実際には教科研と埼玉サークル連協と間で、開催の仕方をめぐって、「激しい論争」があったという。

埼玉で関東教科研をやってくれ、埼玉サークル協が中心になって。そういう話が来て、そんときに民間研究団体の1つである教科研の関東集会を埼玉でやるという考え方は間違いだと。つまり、時の教科研は、様々な団体の上に立つという意識があったんですよ。そういう考えはおかしいというので、埼玉でやるなら引き受けるけれども、関東地区教育科学研究集会というふうにして、教科研主催の関東集会はやらない。主催は関東のサークル協議会、それと並んで教育科学研究会と入れるのはいいけれども。そのような激しい論争してね。¹⁸

このような、中央の民間教育団体に対する埼玉サークル連協の姿勢は、先に見た「仮に中央にあったとしても、その下部組織だ、本部だ、支部だ、縦の系列で教育運動を捉えてはならない、そういうものが日本の教育をダメにしてきたという認識」「中央で民間教育団体ができる足場のために、全国各地に支部を作る云々かんぬんという者に対しては、極めて警戒的で、サークルという以上は、地域に根ざさなければならない。」との斎藤の証言と重なる。

埼玉サークル連協の活動は、「上からくる教組の教研大会」がもたらす不自由さや疲弊への問題意識、「様々な団体の上に立つという意識」を持つ教科研をはじめとする民間教育団体への「極めて警戒的」な姿勢に貫かれていたのである。

③民間教育団体機関誌への寄稿

なお、埼玉サークル連協の活動の成果について、加盟サークルやサークル所属会員の中で、民間教育団体の機関誌へ論文等を掲載しているものが認められる。たとえば、日生連の『カリキュラム』誌では、埼玉県川口教師の会「国分一太郎氏の『教師』〈その仕事〉をめぐって わたくしたちはこう学んだ」(1956年10月号)、浦和体育サークル「生活教育としての体育」(1959年7月号)、大畑佳司(南浦和小)「新しい集団 教師・父母とのむすびつき」(1959年10月号)(大畑は、浦和教育を語る会に所属¹⁹)などがある。川口教師の会の掲載論文には、輪読と話し合いを重ねることで教師の見方が豊かに変じていった様子が示されており²⁰、サークル活動の成果が民間教育団体に還元された一例とあってよいだろう。

④埼玉県教育研究所との関係

埼玉県の公的な教育研究体制との関わりについて付言しておく。埼玉県内のサークル発足の背景として、埼玉県当局による教育研究組織の再構築をはじめとする県内の教育研究状況への問題意識や不満があったことを拙稿で指摘した²¹。その意味で、埼玉県教育研究所所員大島仁太郎と西尾幸子の埼玉サークル連協への関わりは注目できる(大島はのちに所長)。

斎藤によれば、大島は戦前は秩父で中学、戦後は高校の数学の教員を務め、教員養成所所長ののちに埼玉県教育研究所の所員になった人物で、埼玉サークル連協へには「ずっと参加してやってくれ」という²²。大島は1956年7月30、31日の両日に行われた合宿研究会に参加、第5分科会(「進学就職の問題をどうしているか」)の協議に加わっている。同分科会への参加者は少なかつたようだが、大島は次のような感想をサークル機関紙に寄せている。「中学校で就職する生徒のために先生方の行っている教育活動の実態について詳しく知る機会を得ました。就職する生徒の持っている意識、家庭的背景、更にそれらの子供が就職して行く条件、更に就職後の生活条件について事例的に分析し、現在おかれている教師の立場からヒューマニテイに満ちた教育活動を展開している先生方の努力に深く感激しました。不運な条件のもとに、最も不利な就職を余儀なくされ、しかも資本主義的社会悪に直面させられる生徒にとって、教師のヒューマニティーこそ最も強い防波堤であることを知り、先生方に対する新たな感謝をささげたいと思います²³」。

また「教育実践者の研究について」と題する論考を寄稿し、「個人研究と共同研究との調和」や共同研究を成り立たせるための実証資料の重要性を指摘するなど、サークル活動を進展させる立場から教育研究のあり方について提言を行っている²⁴。

同じく所員の西尾幸子は、機関紙第1号に「輝く若芽を」を寄稿している。そこでは、「四年前頃までは、県内に心おきなく語れる友もない淋しい気持でよく夜おそくまで東京の集りや研究会に出かけたものでした。[中略]埼玉にも今はサークルが輝く若芽を出して高くのびようとしています。何か幸福の扉でもあける思いですこやかな成長をひたすら祈っています。人間は景気の良い理屈を並べても、さて自分の実践となると、又何と貧寒なものかと一人の力の弱さをしみじみと感ずるだけですが寄りあって手を取り少しずつでも歩きましょう。」と、自己の経験を踏まえながら、サークルによる教育研究の場の誕生を歓迎している²⁵。

教育研究所について、斎藤は「教育研究所なんか、当時教職員組合と県の教育委員会、それが教育研究所と合同でいわゆる教研集会を共催していた時代がありますからね。その時代なんかではそういう役割を果たしたんでしょうね。²⁶」と、この時期に限られた特徴であると推測している。教育研究所に関しては、所員の人選も含めて不明な点も多い。この点については今後の課題としたい。

(4) 教育学界との関わり

埼玉サークル連協の活動を、特にその自律性の観点から検討してきた。行政主導の研究、教組の研究、民間教育団体の研究など、上からの、いわば圧力としての組織的な研究に対して、その独自の課題を独自の方法で追究するサークルの姿を捉えることができた。ここでは、教育学・教育学者との距離感のようなものを掴んでおく。というのは、民間教育団体にしても教組にしても、その下部組織にはならないことに自覚的であったとしても、教師個々の持つ悩みや課題、地域の現実から生じる問題を掘下げるには、教員同士の話し合い活動のみでは難しい面があったと思われるからである。教育学界との関わりは、教育実践・理論面において思索を深める上で、したがって会の充実や存続に関わる問題となる。問題はそこかわり方になる。

まず、教育学、教育ジャーナリズムに関しては、各民間教育団体の教育研究の動向を幅広くおさえていた様子が見えてくる。斎藤晴雄は次のように語っている²⁷。

[海後勝雄が引用者] 大転換して書かれたのが、『教育科学入門』[東洋館出版社、1955年刊行-引用者]、つまり、あの人がマルクス主義を本格的に勉強して、それでマルクス主義によって教育史を再編成する。日本の教育科学を再検討したらどうなるか、というのを世に問うた、というのがあの『教育科学入門』。それを矢川徳光さんなんかにかこっぴどく、にわかづくりのマルクス主義者がどうのこうのってやられた。大変興味深い論争があったりして、そういうのは、20代の僕らには新鮮だったね。教育ジャーナリズムというのは、教育雑誌も教師の友っていう月刊雑誌もあったんですよ。これは当時購読してた中では、到着を待ちかねて食べるように読みましたね。[中略] 当時の教育雑誌は、『教師の友』、それから教科研の雑誌『教育』、日生連が『カリキュラム』、大判の、あれは改めて『生活教育』にかえて、日本作文の会は『作文と教育』という具合で、民間団体の雑誌、機関誌が次々と出された。そういう中で大いに学ばせられた。

次に表1において、各サークルと教育学者との関わりをみれば、本庄教師の会の活動に東京大学の五十嵐頭が「毎回参加」、いるまの教師の会に埼玉大学の川合章が参加、のびろ会（土合教師の会）では学習・研究会が東京大学の田代堯の自宅で「よく」行われていたことがわかる。東京大学、埼玉大学といった近隣の大学の教育学者との関わりの中でサークルの活動が行われていたところもあった。川口教師の会は、活動の中心的存在であった新井忠雄とのつながり（埼玉大学1期生）から、埼玉大学、とくに川合章との関係が強かった²⁸。1955年の時点で、五十嵐頭（1916年生まれ）は39才、田代堯（1918年生まれ）が37才、川合章（1921年生まれ）が34才と、いずれも30代であり、第二次大戦後に研究者としての実質的な活動を開始した人たちであった。これに対して、新井忠雄は26才、斎藤晴雄は24才である。川合と新井は埼玉大学において教師・学生との関係ではあったが、師弟の関係というよりは、戦後教育の価値を共有し、それを実現していく仲間、あるいは助言者としての関係であったようである²⁹。

埼玉大学として、公式に県のサークル協と関係をとるとか、そういうことはなかったですけど、埼玉大学の先生たちのかなりの人たちが合宿研究会には参加してくれた。その頃は、我々も生意気だったんだなあ。「講師」なんて言って、大学の先生を講師に招くのはおかしい。何が講師だと。大学の先生からも平等に会費を取る、講師の席を設けるなど、特別扱いはしない。そういうことに、若手の先生も共鳴してくれて、そうだ

そうだと言って、一緒になって机を担いだりして[会場づくりを-引用者]やってくれました。川合章先生とか、海老原治善、佐藤英一郎、心理学の先崎正次郎とか、桑原作次、海後勝雄氏も思いついたように来て。

30

埼玉サークル連協は、基本的には教育学者から指導を受けながら活動を展開するというものではなかった³¹。また、そこには、若手の教育学者との関わりにみられるように、サークル活動に参加した青年教師たちの、戦前・戦後をくぐり抜けた教育学者に対する厳しいまなざしが存在した。斎藤らがいた地域で川口プランを主導した梅根悟(1903-1980年)³²に対する見方を挙げておく。

戦後の教育学者の素早い、あれよあれよという間に成し遂げた、見事な転向というか、転進というか、そういうものに対して非常に不信感を持った。例えば、一例を挙げれば、梅根悟。この人の、研究者としての業績を決して否定するものではないし、進歩的民主的教育学者の代表格と目されている人ですが、戦後新教育の騎手、旗持ちだったわけですよ。でも、あの人は、戦争中、旧制の川口中学校、今の川口高校ですね。旧制の川口中学校の校長を務めた。その頃、どんな川口中学校の教育をやったかっていうのは、川口の人たちはみんな知ってるわけですよ。あの頃は、旧制の中学校っていうのは、地域に大きな影響を与えましたからね。今の新制高校の比じゃないでしょう。旧制高校のような影響力を持ってましたから。それで梅根悟さんが川口中学校の校長として、自らも軍曹、軍隊まがいの装束を固めて、激烈な愛国演説をぶって、勤労働員に生徒を駆り立て、軍事教練を採用し、なんていうのはすごかったわけですよ。それが戦後コロっと変わってね、それで新教育だの、民主教育だの言い出して、それから当時の川口の助役についてますよね、校長から助役になって、これも公職追放になると、戦争中の言動が追求されて、それを川口市長が助役にしてしまうことによって、救ったんだという説もある。そういうのを見てきていてね。[中略]あの人[梅根悟氏-引用者]の西洋教育史、ペスタロッチ研究、デューイ研究など、学問的な業績は、我々がいい加減に批評し尽くすことができない大きさを持っている方だと思いますけれども、やっぱり、同じ地域にいてそういうのを見聞しているだけにね、非常な反発っていうのかな、違和感っていうのかな、そういうのを感じましたね。

33

3. 地域教育研究サークルの「役割と位置」-日教組、民間教育団体にとっての-

(1) 「教育反動化」政策と日教組・民間教育団体の教育運動との対立図式の中で

地域の現実、子どもの現実に即した教育研究にこだわり、横の連携を求め、学界との緊張関係も保ちつつ活動した埼玉サークル連協の実態を明らかにしてきた。このような事例の位置づけには、全国的なサークルの動向の把握を含む比較研究の蓄積が必要となろう。ここでは、まず国内の教育界の動向に関連づけて、1950年代の教育研究サークルの置かれた状況をおさえておきたい。

大槻健は、文部省の社会科改定の動きに対する批判として1953年8月に社会科問題協議会が公表した第一次声明を、「戦後民間教育運動史上の重要な画期」と位置づけている³⁴。文部省の教育政策に対して、多くの民間教育団体が「共同の行動」ととったものとして、「のちに[1959年-引用者]民間教育団体の連帯の組織としての民教連[民間教育団体連絡会、のちの日本民間教育研究団体連絡会-引用者]を組織するに至る重要な契機になった」ことを評価しているのである³⁵。1954年には「義務教育諸学校における教育の政治的中立の確保に関する臨時措置法」の制

定、1956年には教科書法案が上程（廃案）、1957年には道徳教育強化策、そして1958年の勤評と続く、いわゆる「教育反動化」政策に対して、民間教育団体と日教組を中心に教科書問題協議会（1957年9月）、道徳教育研究会（1957年10月）が発足するなど、対抗勢力の「結集」「共闘」が強く期待されていた時期であった。

（2）日教組・民間教育団体の地域教育研究サークルへの注目

このような政治的状況を背景に、各民間教育団体と日教組は、互いの連携に加えて、各々の教育理念を実現する必要から、地域の教育研究サークルに注目している。日教組の機関誌『教育評論』、日本生活教育連盟の機関誌『カリキュラム』をみても、大槻が「画期」とした社会科問題協議会が声明を公表した1953年以降に、サークルに関する特集記事が散見できる。

『教育評論』では、1954年12月号（第3巻第12号）で「特集・青年教師と学習活動」を掲載し、京都、秋田、茨城の教組支部を含む地域の活動や「青年学習団体のうごき」として、全国青年教師連絡協議会、日本青年教師の会、教科研を通じた地域のサークルの動向を紹介している。翌1955年7・8月号（第4巻第6号）では、「サークル 民間教育団体と教研」と題し、今井誉次郎（日本作文の会）、馬場四郎（日本生活教育連盟）、羽生敦（歴史教育者協議会）、上川淳（郷土教育全国連絡協議会）、佐藤幸一郎（日教組教文部）が参加した座談会の記事が掲載されている。

また、『カリキュラム』誌においては、特に1957年以降にサークル関連記事が多く見られる。たとえば、1957年4月号「地域教育研究サークル運動の昂揚と民間教育団体のあり方について」（海老原治善）、1958年8月号「教師のサークル活動」、1959年5月号「今日のサークル・学校・職場をどう考えるか-全青教サークル運動部会討論発表のために-」（海老原治善）、1959年9月号「特集 民間教育の背骨」などの記事である。

大槻が指摘したように、「教育反動化」への対応に関連づけた「結集」「共闘」のための組織づくりの文脈でサークルへの注目を捉えることは可能である。以下では、日教組、日生連両団体の機関誌に記事を執筆した海老原治善の同時代認識に即して、民間教育運動の「結集」「共闘」のあり方や、そのために日教組、各民間教育団体は地域教育研究サークルに如何なる「役割と位置」を期待していたのか、組織論の観点から検討する。

（3）地域教育研究サークルの「役割と位置」-海老原治善の組織論を中心に-

海老原は、民間教育運動の「統一行動」の起点を、1951年の日教組の教研開始の決定から1953年に至る民間教育団体の創立期に置いている。1952年熱海において再発足した教育科学全国連絡協議会を「ちょうど、労働界における『総評』のように考えすべての民間団体は、教科研へ結集するという方針がとられた³⁶⁾」のが最初の段階であった。しかし、各団体の理念の違いもさることながら、この「教科研結集方式」には組織論の点で「無理」や「欠点」があったという。それは、教科研と各団体の両者の組織のあり方の違いに根ざしていると指摘している。海老原によれば、教科研は、「組織の基盤を地域のひとつのサークルにおき、これの連絡協議をめざすことを建前としながら、一方では、『教育科学』という戦前の伝統をふまえ一定の教育目標をもつて人間形成を主張している」という組織内部の問題を抱えている³⁷⁾。つまり、教科研を連絡協議の場と考えれば、「統一行動」の方針も本来「各サークルの要求にねざしたもの」となるはずのものが、「綱領と運動方針の性格もこれに規制されかわつてこななければいけな」くなるという矛盾である³⁸⁾。これに対して、民間団体は組織のあり方が異なる。日生連や歴教協、創造美育連盟などは、「はつきりと支部組織論にたつ」ものであるため、「専門団体としての当然のあり方であると思われる反

面、中央本部と支部という、いわば縦のむすびつきとなり、地域での昂まりという点に欠け、セクトになりやすい欠かんをも持っている」³⁹。また、日本作文の会は「支部組織論にたらず、地域でのまとまりを単位として根づよい下からの組織に立脚しての組織論」により成立している⁴⁰。

以上のような組織のあり方の違いについて「連絡協と専門団体的性格のものに、専門団体たる民間団体を結集すること自身に無理があつたかもしれない。」と海老原は述べている⁴¹。その点で「教科研＝総評論」を否定した、1953年の社会科問題協議会を、大槻と同様に「民間教育団体の横の提携」の可能性を持つものとして一定程度評価している。ただし、海老原は社会科問題協議会の「統一行動」の考え方について、「運動の過程で、社会科を守るというグループと、社会科は廃止すべきであるが、現在の反動攻勢に対して斗うその意味での改悪に反対するという観点から斗うというグループにわれてしまい、運動は迫力をかくものとなつてしまつた⁴²」という。さらにこの運動は「各団体の幹部層だけの動きとなつてしまい、大衆討議によるもりあがりはみられなかつた。というのもこうした広 般な運動をすすめるうえで重要な役割をはたす事務的な働き手がなく、とくに教科研と日生連の事務局のものに、少くとも初期はすべてがおわされる実状であつた⁴³」。組織上の問題点も含んでいたのである。

1952年、全国青年教師連絡協議会が結成された。「日本生活教育連盟の青年教師の会から、一歩ふみだし、日生連、教科研、作文の会、歴教協といった民間団体のわくをこえてあるいはこれらの組織にはついていないが、とにかく、日本教育の危機をきりひらくために歩みをつづけている全国の青年教師を結集しようということを目指し」誕生した集まりである⁴⁴。これについて海老原は、『わが悩みを語る』段階から入ったが、やがて「民間団体のセクトをこえて結集しはじめた」と評価している⁴⁵。その全国青年教師連絡協議会の立案によって、1956年に民間教育団体青年教師懇談会が結成された。そこでは、「従来の幹部間の話しあいによる連合の結成方式でなく、もつと戦後教師生活のなかから育つてきた、行動力のある青年教師たちのとらわれない話しあいによつて、なんとか共同の大研究集会をもてるように」する方針について話し合われた⁴⁶。翌1957年夏に開催された大会は「バラバラの大会に終り、統一行動の巨大なエネルギーは結集されなかつた」が、同年冬の会合では「全青教は中央での統一活動もさることながら、もつと地域サークルの育成、地域サークルの横のつながりの組織化、この中からの統一活動への要望の声をあげてゆくべきであるとの結論に達した。またなにかスローガンを先にだしてやるというのでなく、あくまで、各地域のサークルの直面している問題から出発し、そこを一步高めるための連絡協議の組織であることが確認され」るに至つた⁴⁷。

中央の民間教育団体と地域教育研究サークルとの理念のズレとそれに伴う組織上の問題を自覚しながら、それでもなお「統一行動」を実現していくために、地域の教育研究サークルへの関心が深められていったことがわかる。なお、日教組においても、1956年に実施された第6次教研集会の成果報告の中で「今後の教研活動の量的、質的なひろがりと深まりのためには、より一そう民間教育運動と教育研究サークル活動を活発化する必要がある」との認識が示されている⁴⁸。

海老原は、1955年頃から「活発」化した地域教育研究サークル運動について、「新しい希望が期待される」として、その特徴を次のように述べている⁴⁹。

教育研究サークルのなよりの特質は、身近な教師たちの悩みから出発したことである。その悩みは、自己自身の生き方についての場合も、子どもについてのこともあつた。がとにかく現実のひとりひとりの直面している悩みを語りあうことから“仲間づくり”として始められた点である。中央での教育をめぐる一定

の主張に共鳴し、その実現のために同志的に結合したのではなく、職場の問題でも、ごく素朴で、研究会などではだせないような初歩的な悩みを語りあうところからの出発であつた。こうした時期が一定期間すぎると、読書会、やがて、専門的な教科研究へと分化していくのが、多くの場合の共通した進み具合であつた。したがって中央の民間教育運動に対しても、いわばAAプロツクのように、よいものはすべての団体からとり入れるが、どこか一つの組織に属することをさけるという姿勢であつた。

一方で、地域教育研究サークル運動の課題については次のように述べている⁵⁰。

サークル協〔県単位のサークル協議会のこと - 引用者〕はできても、その中心的な仕事をして、県全体をひきあげてゆく教育研究の課題はなにか、そのプランは、とかいう具体的な点になると、まだまだ不十分なのである。それに、この県サークル協自体、まだ各県で漸く動きだした程度で、全国的な展望、そのはたす役割についても、討議がかわされていない現状である。またとかく、経験交流に終りがちなサークルでの研究を質的に高める役割をはたすものが要請されている。

海老原によれば、こうした課題を克服する方向で、地域教育研究サークルを「育てる」「指導する」のが、「中央と専門民間教育団体に課せられた任務」ということになる。具体的には、特に日生連の場合、「社会科を真剣に考えている教師たちをもとに、地域教育研究サークルへの転換が可能ではないか〔中略〕一人一人の教師たちの実践の支えになるような理論を、共同研究のなかでうみだしてゆくことが基本的な任務であろう〔中略〕中央＝専門民間教育団体は、このサークルの中から、より専門的な研究をはかろうとする個人加盟の強固なものとしてゆくこと」などが展望として示されている⁵¹。

日生連の機関誌であることから、日生連の教育理念の実現、特に政治的な対立状況を考えれば、地域教育研究サークルとの連携を図ることによって、「統一行動の巨大なエネルギー」や「広般な運動をすすめるうえで重要な役割をはたす事務的な働き手」を得る必要があつた、とする海老原の主張は理解できる。また、サークルが抱える固有の課題の指摘も納得し得る。しかしながら、地域教育研究サークルを不十分、未熟なものとして「育てる」「指導する」対象として捉え、「中央での教育をめぐる一定の主張に共鳴し、その実現のために同志的に結合したのではない」というサークルの特質も把握した上で、中央組織の理念を実現するための「役割と位置」を与えたのである。

海老原は、上述の「新しい希望が期待される」サークルの一例として、川口教師の会や浦和教育を語る会などを挙げているが⁵²、実際にそれよりも早い時期に、埼玉サークル連協に対して働きかけをおこなっている。1956年7月、発足して半年後の埼玉サークル連協の機関紙『あしなみ』第3号に、「運動理論の確立を」と題して持論を披露している⁵³。

サークル発展のために、これまでのような自然発生的なあゆみ方でなく、もっと日本の現状のなかでうちだされてくる上からの教育政策の特質をはっきりとつかみ、これをつきやぶっていく教員組合運動の全体のなかで、どういう位置と役割と任務をもってやっていくかという点を、理論的に、すっきりとさせて進むべきではないかと思うのです。“教育運動理論”といったものを、いままでの実践のなかからうちだすべき段階ではないでしょうか。もっと目的意識的に仕事をすすめていく時だと思います。例えば、空白地帯の組織的な活動によるほりおこしなど、教育研究活動として民間教育運動と埼玉のような地域的結合方式との関連

など。[中略] 経験を出しあうという仕方から、もっと理論的に問題提起をする必要があるのではないかと思います。

これに対して、発足して半年とはいえ、仲間との出会いに高揚してばかりではいけない、埼玉サークル連協自身の課題認識も認められた。同月に開催された合宿研究会では主題「サークルのあゆみを語ろう」が第七分科会として設定されており、事務局による記事「新たな前進のために-第七分科会に期待す-」を掲載している。そこでは、「各地の様子は多くの仲間にとって未だ十分とはいえないのが、客観的な事実である。各地の問題点はどこなのか、共通すること、特殊な事情などを細かく検討し、実践の方向を具体的に出し合おう。サークルが作れないのはなぜなのか?・・・それについて、他地域の仲間はどんな援助をしたらよいのか?各地域と連絡協議会との有機的な関連はどうあるべきなのか。このことは必然的に、連絡協議会の例会のもち方、財政、機関紙、事務局の強化などに関連してくるであろう。更に教組の組織の中でサークルをどう位置づけるかということにまで問題は発展するであろう。⁵⁴⁾と、今後の埼玉サークル連協のあり方について話し合う必要を指摘した。サークルが横へとひろがるとともに、そのつながり方や他の団体との関わりは当然突き当たる課題ではある。上記の海老原の記事に対する、埼玉サークル連協の直接的な反応は認められないが、この記事に掲載すること自体に、そのあり方についての議論が必要であるとの認識が示されている。

しかしながら、教育政策と教員運動の対立構図を前提に、教組や民間団体が半ば一方的に地域のサークルの「位置と役割と任務」を方向づける海老原の考えは、これまでみてきたように、川口教師の会や埼玉サークル連協が大切していた「地域の高さこそ、わが高さ」という地域中心の考えや教員の自律性という理念、とは相容れない、時には対立が表面化するものであった。上述した埼玉サークル連協の動きと照らせば、1956年12月の教育科学研究会関東地区連絡協議会第1回研究大会の開催のあり方をめぐっての、教科研と斎藤らとのやりとりが重要にある。すなわち、教科研の下部組織として「関東教科研」の開催を要請されたことに対して、埼玉サークル連協が激しく抵抗し、機関紙『あしなみ』にも東京教科研とのやりとりの経過を報告したことである。斎藤たちが「極めて警戒的」であったのは、海老原に見られる組織の論理と、それが実際に地域教育研究サークルに対してなされた動きに対してであったのである。

おわりに

埼玉サークル連協の発足の過程、活動の実態を明らかにするとともに、当時の民間教育団体や日教組との関わりを通じて、その自律性のありようについて検討してきた。

1955年、川口教師の会の「呼びかけ」から発足した、埼玉サークル連協の目的は、地域の現実や子どもの実態に即した教育研究とそれを促す対等な人的関係基盤の構築という考えを具体化し、県内に広げようとするものであった。会の活動は、機関紙の発行を中心とする会員間の情報交換・交流、合宿研究会や集会での学習活動、懇談であり、県内のサークル同士がお互いの活動を支え合うというものであった。

この時期、中央の民間教育団体や日教組は「教育反動化」政策と対峙し、多くの団体が「統一行動」に向けて動き出していたが、それに伴って組織の形成・運営上の課題を抱えていた。埼玉サークル連協が活動を展開していた時期には、全国でも地域教育研究サークルが次第に活発化した。中央の団体は、「統一行動」のための新たな組織論として、地域教育研究サークルの下部組

織化という「役割と位置」を期待していたのであった。

そのような地域教育研究サークルの「役割と位置」の実現を迫る中央の民間教育運動に対して、埼玉サークル連協は、サークル独自の立場を貫き、下部組織となることを明確に拒否する場面もあった。サークルのメンバーの中には、民間教育団体に所属しているものも少なくなく、当然の県教組の一員でもあった。にもかかわらず、そのような既成の、中央の、大きな組織の論理で、一人ひとりの教員が「教育研究」することを明確に拒んだわけである。組織の論理、上からの論理では、地域の現実を受け止める教員の悩みや課題には応えられない。一人の教員としての生き方をまるごと受け止めることもできない。その解決方法を手探りで見つけようとしたのが、サークルの営みであった。5年後には県内約30のサークルとともに活動する場として定着していった。

1950年代以降の「文部省対日教組」という認識枠組の中に、また全国的な民間教育運動の意義を前提とする、「官と民」の構図の中に、その独自の機能と役割を埋没させてきた地域教育研究サークルの活動の広がりや深まりの一端を明らかにすることができた。その意義は、第一に、地域・教育現場・職場において、教員が自ら向き合ねばならない問題や、職務に限らず教員が人として抱える悩みや課題を、教員同士が受けとめ、共有し、解決の方途を探る、そのような横の情報回路が形成された点。第二にそれを、地域の教員が主体的に構築し、中央の民間教育団体・日教組の縦の情報回路からの圧力によって歪まないように守ろうとした点である。確かに教育研究組織としては、参加教員個々の熱意（費用や時間も）に依存する面が強く、基盤の脆弱性は否定できない。継続性も保証されない。それだけに、個々の教員に突きつけられた切実な教育課題に応えうる教育研究が可能であったのである。

サークルによる教育研究のあり方に比べれば、現在の教育研究・研修のありようは、よほど「安定」し、「充実」しているように見える。初任者研修、各年経験者研修、免許更新講習、教職大学院への現職派遣等、特に行政側からの制度面での整備が強化されてきている。1990年代には教育学にも「教師教育学」という研究分野が確立している。教師は、「教育」の対象となり、様々な手立てや配慮のもとで教師の力量形成が図られる環境にあるとあってよい。本稿で明らかにしたような、地域教育研究サークルにおける教師の営みは、どのようにして現在のよう形に変容していったのか、教育研究の上でそこに何が生まれ、何が失われていったのか、その歴史的過程の追究は、今後の課題である。

註

¹ 思想の科学研究会編『共同研究 集団-サークルの戦後思想史-』（平凡社、1976年）。近年では文化運動の観点から、道場親信『下丸子文化集団とその時代-1950年代サークル文化運動の光芒-』（みすず書房、2016年）、宇野田尚哉・川口隆行・坂口博・鳥羽耕史・中谷いずみ・道場親信編『「サークルの時代」を読む-戦後文化運動研究への招待-』（影書房、2016年）などの研究がある。教育研究サークルへの注目となると、大槻健『戦後民間教育運動史』（あゆみ出版、1982年）があるが、地域サークルの個別具体的な研究には至らない。その点では、二谷貞夫・和井田清司・釜田聡編『「上越教師の会」の研究』（学文社、2007年）が先駆的な研究となる。

² T・A「みんなの集りに」（埼玉教育研究サークル連絡協議会『サークル通信（仮称）』第1号、1955年12月、p.1）。T・Aは事務局長の新井忠雄（川口市立飯仲小学校）のこと。

³ 斎藤氏聞き取り（2012年10月16日）。

⁴ 斎藤氏聞き取り（2012年10月16日）。

⁵ 拙稿「1950年代埼玉県における教育研究サークルの生成と展開（1）-川口教師の会を中心に-」（『埼玉大学教育学部紀要』第69巻第1号、2020年）。

- ⁶ 別府幸子「私たちは悩んでいる-サークル（大宮）の問題点-」（埼玉教育研究サークル連絡協議会『あしなみ』第5号、1956年11月8日、p. 2-3）。
- ⁷ 埼玉県教育委員会編『埼玉県教育史』第6巻（埼玉県教育委員会、1976年）、pp. 326-327。
- ⁸ S「発行にあたって」（埼玉教育研究サークル連絡協議会『サークル通信（仮称）』第1号、1955年12月、p. 1）。Sは斎藤晴雄のこと。
- ⁹ 斎藤氏聞き取り（2012年10月16日）。
- ¹⁰ 拙稿前掲論文。
- ¹¹ 事務局A「今から考えておきたいこと」（埼玉教育研究サークル連絡協議会『あしなみ』第4号、1956年10月6日、p. 1）。
- ¹² 「準備は完了・大いに語ろう-埼玉教育研究サークル合宿研究会-」（埼玉教育研究サークル連絡協議会『あしなみ』第3号、1956年7月30日、p. 1）。
- ¹³ 「関東教育学会研究大会開かる-サークル協から正木氏代表に-」（埼玉教育研究サークル連絡協議会『あしなみ』第4号、1956年10月6日、p. 1）。
- ¹⁴ 「現場の教育研究をどう進めるか（提案要旨）埼玉教育研究サークル連絡協議会」（埼玉教育研究サークル連絡協議会『あしなみ』第4号、1956年10月6日、pp. 2-3、文責は正木欽七）。
- ¹⁵ 「教科研関東地区研究大会 われわれは大会に期待する」（埼玉教育研究サークル連絡協議会『あしなみ』第5号、1956年11月8日、p. 1）。
- ¹⁶ 同上。
- ¹⁷ 湯田堯「わたしは期待している」（埼玉教育研究サークル連絡協議会『あしなみ』第5号、1956年11月8日、p. 1）。湯田は「墨田教師の会」に所属しているが、まだ教科研に登録していないことも伝えている。
- ¹⁸ 斎藤氏聞き取り（2012年9月18日）。
- ¹⁹ 1960年4月開催のサークル代表者会議に浦和教育を語る会の代表として参加している（埼玉教育研究サークル連絡協議会『あしなみ』第10号、1960年4月20日、p. 1）。
- ²⁰ 拙稿前掲論文において、論文掲載の経緯や内容について検討し、教師の成長する姿を明らかにしている。
- ²¹ 拙稿前掲論文において、1950年代前半の県内教育研究団体に対する県当局の関わりについて検討するとともに、県内の教育研究体制のあり方に対する問題意識から川口教師の会が発足したことを明らかにした。
- ²² 斎藤氏聞き取り（2012年10月16日）から、大島仁太郎に関わる証言を付しておく。「埼玉県教育研究所の所員のちに所長、大島仁太郎。この人も参加してくれた。西尾幸子。この人も所員だった。ずっと参加してやってくれて。この大島仁太郎は偉い人でね。実は僕の高校の時のクラス担任。この人はなんと学歴は尋常高等小学校卒ですよ。小学校卒で、独学で数学を中心にして学問を極めて、それで県の教育研究所の所長になる前に、県の教員養成所っていうのがあったんです。そこの所長もやりました。そーゆー、一貫して謙虚な姿勢を崩さない人で、僕なんかに対しても丁寧な対応をしてくれて、数学を教わったんですが、消防自動車っていうあだ名でね。チャイムが鳴り終わった頃には教室に来ているという意味です。授業も1分でも無駄にしない。授業の終わりに紙を配ってこの授業の中でわからなかったことがあったら書いて出してくれ、書かせて、集めて、次回には必ずそれに答えるというやり方を愚直なまでにやった人。この人の影響というのは強く受けています。本当の実力者。学歴は全くないんですから。それでいて、数学を中心にして各教科に通じ、それから毛筆の達筆なること、それと、あの戦争中、ひそかに勤労働員で山で作業をさせられた、その昼休みに弁当食べ終わった後、先生と一緒に弁当食って、大変だなあ、みんななんていうて、ところで君達、天皇機関説というのがあがる時でも不動の姿勢をとらなければならぬ、恐れ多くも天皇…。そういう時代でしょ。そういう時代にあがるを聞いて休みなながら、立たなくていい、天皇機関説というのがあがるんですよ。深くは触れなかったけど、だけど簡単にいえば天皇は神ではない。これは天皇機関説というのは、国家の統治機構における天皇の役割を1つの統治機関であると、そういう考え方で、学問上は立派に成立している。そういう学問なんです。というようなことをあの最中に言ったんですよ。これが後で波紋を呼んで、あの戦争中に生徒に対して天皇機関説の話をしたのが公になったら即クビですよ。聞いた中には、同級生の中には、けしからんという奴がいるわけだ。すべての超法規的な存在である天皇を、天皇機関説、何事だと。まあまあ、で訴え出ると言った奴がいるの。もしそれがあつたら、大島仁太郎さんはあれで教師生命を絶たれていたでしょうね。だけど、周りで、まあ何も密告することは無い、そういうエピソードを持っている人。戦争中、戦争に対してちよっぴりでも批判的なことを漏らした人はこの人しかいなかった。勉強も、毎日これだもんねえと同情を示してくれて、君たち勉強も大変だし体も疲れるだろうけど、授業をしなければなあ。学校の中では常に下っ端で、しかも教師の世界なんて学歴がものを言う世界ですから。だけど、戦後そうやって指導者になって、教員養成所長、教育研究所所長。だから教育研究所なんかが、当時教職員組合と県の教育委員会、それが教育研究所と合同でいわゆる教研集会を共催していた時代がありますからね。その時代なんかではそういう役割を果たしたんでしょうね。」
- ²³ 埼玉教育研究サークル連絡協議会『あしなみ』第4号、1956年10月6日、p. 4。
- ²⁴ 大島仁太郎「教育実践者の研究について」（埼玉教育研究サークル連絡協議会『あしなみ』第5号、1956年11月8日、p. 2）。
- ²⁵ 西尾幸子「輝く若芽を」（埼玉教育研究サークル連絡協議会『サークル通信（仮称）』第1号、1955年12月、

p. 1)。

²⁶ 斎藤氏聞き取り (2012年10月16日)。

²⁷ 斎藤氏聞き取り (2012年9月18日)。

²⁸ 拙稿前掲論文を参照のこと。

²⁹ 拙稿前掲論文を参照のこと。国分一太郎『教師』に関する話し合いの内容を『カリキュラム』誌へ寄稿する際に、草稿を川合に読んでもらった斎藤との一定の距離感にも通じている。

³⁰ 斎藤氏聞き取り (2012年10月16日)。

³¹ 拙稿前掲論文を参照のこと。証言の中で「先生」と敬称を付けているのは川合のみであることからそのような関係性がうかがえる。

³² 西洋教育史を専門分野とする教育学者。東京教育大学名誉教授、和光大学初代学長。

³³ 斎藤氏聞き取り (2012年10月16日)。

³⁴ 大槻健『戦後民間教育運動史』あゆみ出版、1982年、pp. 166-170。

³⁵ 同上、p. 169。

³⁶ 海老原治善「地域教育研究サークル運動の昂揚と民間教育運動のあり方について」(日本生活教育連盟『カリキュラム』1957年4月号、誠文堂新光社、p. 72)。

³⁷ 同上。

³⁸ 同上。

³⁹ 同上。

⁴⁰ 同上。

⁴¹ 同上、p. 73。

⁴² 同上。

⁴³ 同上。

⁴⁴ 海老原治善「青年学習団体のうごき1 全国青年教師連絡協議会の歩みから」(日本教職員組合『教育評論』第3巻第12号、1954年12月、p. 42)。

⁴⁵ 同上、p. 43。

⁴⁶ 海老原前掲論文「地域教育研究サークル運動の昂揚と民間教育運動のあり方について」p. 73。

⁴⁷ 同上。

⁴⁸ 同上、p. 72。

⁴⁹ 同上、p. 73。

⁵⁰ 同上、p. 74。

⁵¹ 同上、p. 75。

⁵² 同上、p. 73。

⁵³ 海老原治善「運動理論の確立を」(埼玉教育研究サークル連絡協議会『あしなみ』第3号、1956年7月30日、p. 2)。

⁵⁴ 事務局「新たな前身のために-第七分科会に期待す-」(埼玉教育研究サークル連絡協議会『あしなみ』第3号、1956年7月30日、p. 1)。

謝辞

本稿に関わる史料の調査・収集に際して、斎藤晴雄先生、斎藤礼子様、山口和孝先生、さいたま教育文化研究所の先生、職員の方々にたくさんのご配慮を賜った。特に、斎藤晴雄先生にはご病気にもかかわらず、長時間の聞き取りに御協力いただくとともに、埼玉教育研究サークル連絡協議会の機関紙等の貴重な史料を閲覧させて頂いた。本稿を直接お届けできなかったことが悔やまれる。この場を借りて心から御礼申し上げる。

(2020年3月31日提出)

(2020年4月10日受理)